思い出すこと

システム制御情報学会が創立50周年を迎えたことは、かことに喜ばしく感慨を覚える。関西大学で約40年間、システム制御の教育・研究にかかわってきたこととして、本学会には、公私にわたり大変お世話になった。以下は念頭におかぶままに記した2、3の思い出で、個人的なものも含まれることをお許しいただきたい。

(1) 90年代はじめから続いていた平成不況が、94年に学会有会運営に深刻な影響を及ぼすようになり、学会の存続が危ないという危機感にとらえられた。第38期会長としての任期中のことである。「講習会などの事業収入で黒字を計上しかつ会員数増加もある程度見込む」というそれまで前提としていた状況が成立しなくなり、事業収入が予想したより伸びない半面、印刷費や人件費などの経費は前年よりアップし、結果として94年度は大幅な赤字を計上することになったのである。

この非常事態に当面して、当時の若手の財務理事、広務理事らを中心とする常任理事は、「経済不況を一過性のもととらえるのでなく、これからは低成長経済下でも学会活動が維持できるように、予算規模を縮小する必要があり、そのため、学会は会員の手で運営されるという原点に戻る」という方針を打ち出した。この線に沿って、事業、編集、分科会などにわたる学会事務を大幅改革するための具体策の検討とその実施に向けての努力が第39期（鳴海英勝会長）、第40期（尾崎稔会長）と引き続き行われ、第41期（井口征士会長）に新体制におけるリストラ元年を迎えることになった。そして期待どおり、41期以降は安定した学会有会運営を取り戻し、今日に至っていることはご承知の通りである。

いま学会が定着し、活発な活動を展開している学会の現況を眺めるととき、事務体制改革を打ち出し実現に漕ぎ合った38～41期の常任理事の英断も実に印象的であったが、以来今日まで「会員の手による学会運営」を維持している歴代会長、理事、主査、各種委員会委員ら役員の多大の努力と会員のご協力にも大きな感謝を受けるものである。

(2) 本学会は、90年以還一連の学術図書「システム制御情報ライブラリー」を朝倉書店より刊行しており、現在までに総数24冊に達している。このライブラリーは88年に日本自動制御協会から現在の学会に改名されたのを機に、会講録の講義や学会主催講習会テキストなどの内容をまとまった図書の形で会員や一般読者に提供することを意図して始められたもので、第30期企画委員会（委員長：児玉慎三、副委員長：福井隆彦、委員：荒木光彦、有本卓、北村新一、須田信英、前田寛）において企画された。

印象的であったのは、このときの委員諸氏がライブラリーの立ち上げに非常に熱意を示されたことである。企画だけでなく、多忙な教育・研究の時間を利用して自ら執筆する労を惜しまず、その後数年間5人の委員の単独執筆あるいは共著の形で延べ8冊の図書が刊行された。このライブラリーが順調に立ち上がり、比較的短期間で先行していたSICE学術図書出版並びに一般に認められるようになったのは、これら委員の熱意に負うところが大きく、感謝の念とともに思い出す次第である。

(3) 個人的な思い出で恐縮であるが、学会に改名される以前の1971～74年に、協会誌「システムと制御」に須田信英氏と協同執筆した連載講義「制御工学者のためのマトリックス理論」を掲載していただいたことがある。2年半の期間にわたる全30回の連載でであり、おおらかな時代であったとはいえ、当方のがまんを入れてよくこだわった回数の会誌紙面を提供していただいたものである。おそらく今後このような規模の連載は許されるものではないであろうし、いま思い出すと感興とともに恐縮の念を覚えるものである。

* 大阪大学名誉教授
名誉会員